

1. 開催年月日：令和6年11月12日(火) 16時～
2. 開催方式：対面、web会議ツールにて実施
3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・宮崎 美紀子・尾形 敏朗・砂川 浩慶・山川 鉄郎・倉田真由美・馬場康夫
web会議ツールにて出席：神田 由築

放送事業者

代表取締役社長：石原 隆

専務執行役員：山口 真

常務執行役員：宮川 朋之

編成制作局長：小川 英洋

編成制作局 編成部：三瓶祐毅、大下直人

web会議ツールにて出席：池田圭吾（編成部）

番審担当：澤 尚志 碓井恭子（記）

4. 議題

- (1) 審議事項：日本映画専門チャンネル「没後10年 高倉健劇場 –永遠の映画スタア、高倉健–」について
- (2) 報告事項：時代劇専門チャンネル「七海ひろきの“良く遊びよく学ぶ”～いにしえの近江を訪ねて～」について

5. 議題（1）※文中敬称略

日本映画史に数々の名作を残した永遠の映画スター、高倉健。没後10年の節目として、11月から来年5月まで本特集を組んでいる。膨大なフィルモグラフィーの中から、TV初『幸福の黄色いハンカチ 4Kデジタル修復版』、『日本侠客伝』『網走番外地』『昭和残侠伝』シリーズなどの名作を選んで放送。また高倉健が出演した貴重なCM集やドキュメンタリー、TVドラマ、特別番組『没後10年「高倉健に、なる。」～映画俳優205本の人生～』も放送する総力特集となっている。

【審議のポイント】

テレビ初放送の『幸福の黄色いハンカチ〈4K デジタル修復版〉』を始め、高倉健の代表作以外に、高倉健が出演したCM集も放送。配信では観られない映画本編以外のコンテンツを編成することについて、また、特集企画や若年層へのリーチについての意見を広く求める。

6. 議題（1）審議内容 ※文中敬称略

・CM集はDVDボックスの特典にあるようなコンテンツで、放送の形式で観られるのは楽しかった。ジェンダーへの意識と価値観が変化している現代において、「男の生命保険」とはいかにも昭和的な表現。「高倉健劇場」放送作品は前後半で“任侠モノ”と“人間ドラマ”に分けられる。任侠ファンの私は前半を楽しみにしつつも、『幸せの黄色いハンカチ』が4K化されたのはうれしい。

『幸せの黄色いハンカチ』のロケ地巡りは公開当時に流行し、私も見学した。北海道夕張市などで撮影した『黄色いハンカチ』は1977年作。コンテンツが古くなるにつれてファンも高齢化し訪問客が減少し、地元の方がロケ地の維持に苦労されているのを肌で感じている。過去の名作を4Kコンテンツとして増やす取り組みは引き続き行ってほしい。過去作にもう一度光を与えるのは、ロケ地映画ファンとしてもありがたい。

- ・今までに3、4回観ているが何度見ても素晴らしく、観賞毎に印象が変わる。若い頃は気にならなかったが、今回は殺人の理由に引っかかった。とはいえ、そんな疑問が吹き飛ばされるほど素晴らしい作品。『黄色いハンカチ』は歴史に残る名作で、本作を観て昨今のマンガ原作の映画化とは違う、不変の感動作が当時の映画には多かったのだと、改めて感じた。健さんの映画やCMは1970～80年代作が多いが、私の世代がリアルタイムで観て記憶している最後の世代だと思う。我が子世代はもちろん、私より少し若い世代ですら、健さんの作品を知らない。そんな世代はクラシック作品に抵抗があるかも知れないが、彼ら若者が70年代の名作に触れられるチャンスを増やしてほしい。
- ・「幸福の黄色いハンカチ」は日本アカデミー賞やキネマ旬報賞などを総なめにした素晴らしい作品で、私は渥美清さんが登場しただけで涙が止まらなかった。若い世代にこのような面白い映画を届けるのが、日本映画専門チャンネルや我々の大きなテーマだ。自分が広告業界出身なのでCM集に興味深く観たが、この頃のCMはサントリーのウィスキーで大原麗子主演作を市川崑監督が撮っているなど、大物映画監督がCMを演出したケースが多い。高倉健のCMでも監督やスタッフをテロップ等で紹介してほしかった。海外ロケを行っていて、予算を掛けて高品質のCMに仕上げている。
- ・CM集は1本15秒のショートムービー集でクオリティも高くおもしろかった。何本も見続けると同じトーンで同じ流れだから飽きるが、健さんの存在感と当時のCMの質の高さを感じた。『黄色いハンカチ』は4Kデジタルリマスターのおかげで大量のハンカチがはためくラストシーンの黄色が鮮やかになり、感動が深まった。夕張市の財政破綻を現地で取材したことがある。夕張や炭鉱町の失われた風景が”日本の近代遺産”として映像記録として残っていることも、本作には意義がある。ちょうど今地上波放送中のドラマは軍艦島が舞台だが、『幸せの黄色いハンカチ』こそ元祖炭鉱映画だ。
- ・最近4K化作品が多いが、その費用はどこが出しているのか。映画そのものは名作なので放送する意味も価値もあるが、若者にどう紹介したらいいものか。任侠ものも編成されているが、あの世界観は今の大学生には縁遠く、健さんの魅力をどう伝えればよいのか悩ましい。CM集は映像作品としても価値があり、時代を映す鏡。私自身、民放連で著作権担当をしていたので、CMの権利処理の複雑さを知っている。CMは代理店、制作会社、スポンサーの中で誰が権利所有者なのか未だに決着がついていない。番組で利用する場合はACCに使用料を払い、「これは番組ではない」と明記する枠を作って放送するのが、放送業界での流れである。今回のCM集の権利処理作業は大変だったと推測される。

- ・『黄色いハンカチ』は任侠ものを卒業した健さんにとって象徴的な作品だ。任侠もの『日本俠客伝』『網走番外地』で、健さんが一気に映画スターになった頃は、学生運動や政治の季節で、私たちにとって健さんは日陰者、反体制のヒーローだった。『黄色いハンカチ』のムショ帰りの男役は、健さんが反体制から体制に転向したように見えてしまい、「男の保険」だなんて生命保険CMに出る健さんは日和ったなどと批判する映画青年がいたことを思い出した。のちにCM出演が映画俳優・高倉健の生活と作品選びを支えたという話を田中邦衛さんから聞いた。健さんにとってCMは俳優業と切り離せない重要な存在だ。
- ・『幸福の黄色いハンカチ』はエネルギーの大転換期に巻き込まれ、急速に廃れる炭鉱が背景にあるが、美しい4K画像でよみがえった北海道の町並み、町を走る車、商品の陳列の様子や、食堂のメニューや値段、キャンディーズの流行歌にいたるまで、これはもはや民俗資料だ。ハンカチがたなびく家にたどり着くまでの炭鉱住宅の荒した町並みも歴史資料である。若者にも見せたい“時代資料”だが、教え子の女子大生に本作を見せたら男女、夫婦の在り方に現在では賛否両論があるだろう。でも、そういう男女の在り方も含めての歴史資料である。高倉健という映画スターはマスキュリティを背負っている。「自分、不器用ですから」、「男の保険」と俳優そのもののイメージが凝縮されたCM集に、背負わされたマスキュリティが如実に表れていた。このほか『没後10年「高倉健に、なる」～映画俳優 205本の人生』と、レコード会社8社を横断してリリースされたCD制作の裏側を紹介する「健さんに逢いたい～映画俳優・高倉健 歌の世界～」などの番組も興味深かった。本編、関連番組ともにより特集になっている。
- ・既に指摘されたように『黄色いハンカチ』の時代は「男とは、女とは」という明解な捉え方があった。その時代に活躍した高倉健のイメージをCM集は凝縮して見せている。共通点は自然の中や外国を高倉健が1人で旅している。決して孤独ではなく自由な旅人風情だ。そして女性が登場しない。高倉健というたぐいまれなスターを通して、男の理想像、憧れ、カッコよさ、悲哀、孤独を描いている。ところが今、これを見ると健さんは骨の髄まで昭和の男で、令和の時代には浮いてしまうだろう。このCMを通して時代や社会の変化が見えてきた。また、特集にあるドキュメンタリー「むかし男ありけり」や早坂暁脚本の異色ドラマ『刑事』は必見。特集でしか取り上げられない作品だが、面白いものをしっかり編成していてうれしくなった。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・高倉健没後10年企画は当チャンネル以外に、東映、松竹のチャンネルも企画していた。『黄色いハンカチ』は放送できたが、12月以降に放送する『番外地』シリーズでは『望郷篇』が放送できないなど、編成の調整に苦労した。しかし、他チャンネル共に高倉健の魅力を伝え、盛り上げたい気持ちが共通していたので、編成はうまくできたのではないかな。
- ・『黄色いハンカチ』は著作権元から長いこと放送許諾が降りなかったが、4Kに注力する日本映画専門チャンネルということで、4K化の費用負担をする条件や宣伝力などから総合的に判断していただき、4Kリマスター修復版の放送許諾が降りた。松竹映画の代表作なので通常より費用と手間が掛かっている。通常のHD放送よりも4Kは権利料が一般的に高額になるが、没後10年特

集の目玉として必要な作品だと判断した。配信との差別化のためにCM集やオリジナル特別番組の制作も行い、チャンネルの独自性を打ち出せたと思う。

- ・CMの権利処理は、ACCに使用目的を申請し、各広告主と代理店、制作会社の3つの連絡をすることから始まった。今回は、事務所の高倉健プロモーションさんからの許諾をいただき、広告主→代理店→制作会社の順に連絡して素材使用の許諾を得た。その他、音楽の許諾も必須であり、JASRACに登録があれば申請し、なければ当時の情報を元に音楽家の連絡先を探し当てて申請した。今回は制作会社が閉業していたなど、許諾を得るのに非常に苦労したが、素材がデジタルで残っていたのも幸いだった。
- ・映画史に残る俳優をこのようなボリュームで紹介できるのはめったにないことだ。オンデマンドやサブスクリプションに慣れた若年層に昭和の名作をどう伝えるか。一見とっつきにくそうな作品と若者を繋げるのは、我々にとって大きな仕事だと思う。夕張の財政破綻した事実を知って『黄色いハンカチ』を観ると、夕張の町の変化がなんだか恐ろしく、そして哀しく感じられた。この映画はドキュメンタリーではないが、当時の風景がリアルが描かれていて、1970年代の夕張はあんな町だったのかと、過去の観賞時とは異なる視点で観ることができた。また、あるコピーライターの方が以前「CMだって番組なんだ」と表現していたが、まさに今回のCM集で健さんを観て心があの時代に戻った。こういった特集で時代を見せることも面白そうだ。

7. (2) 報告事項：「七海ひろきの“良く遊びよく学ぶ”～いにしえの近江を訪ねて～」について
- ・9月に時代劇専門チャンネルでは、時代劇ファン層を開拓するために宝塚歌劇団の時代劇にスポットを当てた番組を6年続けている。その中で最も反響が大きく、「必殺」「鬼平」シリーズなどの時代劇ファンである七海ひろきを起用し、歴史や文化を学ぶために滋賀県近江八幡を一泊二日で訪れるオリジナル旅番組を製作、放送した。時代劇の枠組を広げた内容だが時代劇ファンからの反応も良く、加入数増加にもつながった。七海本人のSNSを通じてファンが聖地巡礼したり、加入した七海ファンが時代劇を観るようになるなど相乗効果が生まれている。

8. 連絡事項

次回第92回番組審議会は2025年2月18日(火)、15時から、対面、オンラインのハイブリッドにて開催予定。